

第一六六號

2046

保存期限  
決裁指定  
決裁指定  
決行指定

主務局長  
受領  
提出  
昭和十二年十二月二十日  
受領  
昭和  
了結  
昭和

大臣  
次官  
主務局長  
事務課長

事務次官  
回付  
決裁  
十二年  
參第一六三五號  
起元應(課)名

連帶  
局長  
局長  
課長

參與官  
高級副官  
主務副官  
主務課員

決行(決裁)後  
回覽(課)名

課長  
課長  
課長

書記官  
審察  
筆記者

陸軍省  
13.1.28  
陸軍省  
13.1.27

甲兵部



陸 普 副官ヨリ陸軍技術本部長へ通牒  
 首題火砲客年十二月十八日附陸技本 甲第七四七號上申  
 ノ通定メラルヘキニ付該圖面(概説)一〇九部送付セ  
 ラレ度

陸普第四九六號 昭和三年一月卅一日

右送付アリタル後左案決行相成度

陸 普 副官ヨリ別紙配賦表ノ箇所へ通牒  
 首題火砲別紙圖面ノ通定メセラレシニ付該圖面  
 (概説)(一)部送付ス

陸普第七一〇二號 昭和三年十二月十九日

教育總監部及關東軍行三(一)内ヲ別紙配布表ノ通ニ改メ作

昭和三年三月二十四日 現品ハ銃砲部ニ送付



九七式五種七軌車起用圖面

配賦表

航空兵		總監部										配賦簡所		配賦部數	內譯計																
飛行隊	飛行司令部	戰車學校	習志野學校	教導學校	仙臺	豐橋	熊木	自動車學校	重砲兵學校	野戰砲兵學校	通信學校	工兵學校	騎兵學校	步兵學校	砲工學校	豫科士官學校	本科士官學校	本城部	築城部	技術部	造兵部	兵器部	參謀部	兵器部	配賦部數	內譯計					
		一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一					
第五師團		第三師團		第二師團		近衛師團		第六、九、十一、十四、十九師團		第一、四、七、十二、十六、二十師團		航空技術部		濱谷		明野		下志津		同支廠		航空研究所		技術部		配賦部數		內譯計			
電信隊		兵器部		出張所		兵器部		氣球隊		鐵道隊		電信隊		兵器部		兵器部		兵器部		兵器部		兵器部		兵器部		兵器部		兵器部		各一	各一
一		二		二		一		六		六		一		一		一		一		一		一		一		一		一		一	一
要塞司令部(除羅津)		派遣師團		飛行隊		騎兵集團司令部		混成第十一旅團材料廠		混成第一旅團材料廠		電信隊		自動車隊材料廠		野戰航空廠		同支廠		野戰兵器廠		兵器部		兵器部		兵器部		兵器部		兵器部	兵器部
各三		第十二		第四		第二		第一		第一		第一		第一		第一		第一		第一		第一		第一		第一		第一		第一	第一
一〇九																															

別紙添付  
圖面別送

陸技本甲第七四七號

九七式五糶七戰車砲假制式制定セラレ度件上申

昭和十二年十二月十八日 陸軍技術本部長 久村

陸軍大臣 杉山 元 殿

首題火砲左記圖面及細目名稱表ノ通假制式トシテ制定セラレ度審査經過ノ概要竝概説相  
添へ上申ス

追テ普通兵器トシテ制定セラレ度

左記

一 九七式五糶七戰車砲假制式兵器圖 (目錄、附表、1-5葉)

二 同 細目名稱表

三 同 審査經過ノ概要竝概説

一部  
二部  
二部

陸軍省  
陸軍技術本部長  
久村

陸軍省  
陸軍技術本部長  
久村  
12.12.19

陸軍省  
陸軍技術本部長  
久村

陸軍省  
陸軍技術本部長  
久村  
12.12.20

九七式五糧七戰車砲審査經過ノ概要

昭和十二年十二月  
陸軍技術本部調製

陸

軍

九七式五糎七戰車砲審査經過ノ概要

一 昭和十一年九月二日陸密第八三四號ヲ以テ當部研究方針ニ追加セラレタル戰車裝備トシテノ五糎七戰車砲ノ設計主要條件

次ノ如シ

口徑	五七糎
彈量	二五五八
初速	三四九米三
最大腔壓	一七五〇 <sup>2</sup> 糎 <sup>2</sup>
最大射程	約六〇〇〇米
高低射界	負一五度乃至二〇度
方向射界	左右各一〇度
砲身後坐長	二五〇耗
砲身重量	約八〇 耗

九〇式五糎七戰車砲ト同一トスルモ機能及抗堪性ヲ向上ス

砲全備重量 約一六〇瓩

ニ右條件ニ基キ昭和十一年九月設計ニ著手シ同年十一月二門試製  
ヲ造兵廠ニ注文ス

昭和十二年三月試製砲竣工シタルヲ以テ同月大阪工廠及大津川  
射場ニ於テ第一回試験ヲ行ヒ所要ノ修正ヲ加フ

同年五月大阪工廠及大津川射場ニ於テ第二回試験ヲ行ヒ試験射  
撃台上及戰車上ノ諸機能ヲ檢ス

同年七月試製戰車ニ搭載シ富士裾野ニ於テ戰車上ニ於ケル射撃  
機能ヲ試験シ更ニ同月大津川射場ニ於テ射撃試験ヲ行ヒ機能良  
好ナルヲ確認ス

昭和十二年八月試製戰車ト共ニ陸軍戰車學校ニ實用試験ヲ委託  
シ長野縣有明演習場及富津射場ニ於テ試験ヲ實施シタリ

實用試験ノ結果「試製砲七戰車砲ハ從來不備トセシ個所ニ對  
シ概ネ適當ニ改修セラレ實用價值ヲ向上セシモノト認ム」トノ  
判決ヲ得タリ

以上各種試験ノ結果得タル本砲ノ決定諸元次ノ如シ

口徑	五糎七
彈量	二貳五八
初速	三四九米三
最大腔壓	一七五〇貳每平方糎
射程(射角二〇度)	四七〇〇米
高低射界	負一五度乃至正二〇度
方向射界	左右各一〇度
砲身後坐長	二五〇糎
砲身重量	七五貳
砲全備重量	約一五〇貳

以上ノ結果ヲ綜合シ本火砲ハ制式兵器トシテ實用ニ供シ得ヘシ  
 ト認メ且本砲ノ整備亦急ヲ要スルモノアルヲ以テ今回假制式ト  
 シテ制定方上申ノ手續ニ及ヘリ

陸

軍



2054

九七式五糎七戰車砲概説

昭和十二年十二月  
陸軍技術本部調製

陸軍

九七式五糎七戰車砲概説

第一性能

戰車砲塔ニ裝備シ次ノ性能ヲ具備セシメ九〇式五糎七戰車砲ニ比シ機能、抗堪性ヲ向上シ操用ヲ便ナラシム

砲身長	一八四	口徑	五糎
彈量	二	初速	三四九米三
射程 (二〇度)	四七〇	高低射界	負一五度—正二〇度
方向射界	左右各一〇度	砲身 (砲尾体共)	七五
搖架 (裝着品共)	四六	砲架	二八

## 全備火砲

約一五〇疋

## 第二 構造及機能ノ大要

## (1) 砲身

單肉身管及砲尾体ヨリ成リ身管内腔ノ經始ハ九〇式五糧七戰車砲ト同一トシ後端外周ニハ斷隔螺ヲ施シ砲尾体ト結合シ得シム  
 砲尾体ハ後端ニ閉鎖機室ヲ成形シココニ垂直鎖栓ヲ收メ前部ハ斷隔螺ニヨリテ身管ト結合スルヲ得シム側方ニハ閉鎖機ノ手動  
 竝自動開閉裝置ヲ附シ下端前部ハ駐退復坐機ニ對スル連絡臂ヲ成形ス

## (2) 搖架

搖架ハ水壓駐退機及發條復坐機ヲ並列收容スル鋼製体ニシテ上  
 面兩側ニハ全長ニ亘リテ準梁ヲ形成シココニ砲身ヲ裝載ス  
 搖架ノ砲塔外露出部ニハ防彈鋼板製ノ被套ヲ裝シ搖架ヲ保護ス  
 搖架体ノ後部ニハ準板、底區、防危板、肩當、眼鏡、藥莖受等  
 ヲ裝着ス

(8) 砲架 橋架体ハ中央部兩側ノ準測ニヨリ砲架中匡ニ結合セラル

架体及砲架中匡ヨリ成ル

砲架中匡ハ特殊鑄鋼製ノ匣形体ニシテ左右兩室ニ分レ右方ハ準測部ヲ成形シテココニ橋架ヲ嵌裝シ砲身、橋架ノ裝着部トナリ左方ハ眼鏡孔ヲ有シココニ眼鏡孔蓋ヲ裝ス

中匡ノ上下面ニハ砲身軸線上ニ於テ垂直樞軸孔ヲ穿チ砲架ノ同樞軸ニヨリテ砲身、橋架ト共ニ方向旋回ヲ行フ

架体ハ砲架中匡ヲ收容スル匣形体ニシテ上下面ノ垂直樞軸ニヨリ之ニ方向旋回ヲ許容シ外側方ニ砲身ヲ有シ砲塔ノ同室ニ裝載セラレ砲身橋架合成体ト共ニ俯仰運動ヲ營ム

(4) 眼鏡

橋架左側ノ眼鏡托架ニ裝着セラルル望遠鏡式ノ照準眼鏡ニシテ内部焦點鏡ニ射距離零ヨリ二千米ニ至ル二百米單位ノ目盛ヲ施ス

2058

銃砲

陸軍省 陸軍部 陸軍技術本部

陸軍省 陸軍部 陸軍技術本部

陸技本甲第七二六號

九七式五糧七戰車砲圖面並概説送付ノ件通牒

昭和十三年十一月十七日

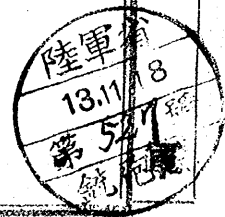
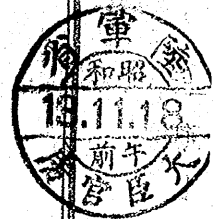
陸軍技術本部副官 筒井三

陸軍省副官 國分新七郎 殿

本年一月三十一日附陸普第四九六號通牒ニ係ル首題ノ圖面並概説  
各百貳拾通送付ス

圖面四拾七枚  
概説 壹枚

追テ現品ハ陸普番號押捺ノ上銃砲課へ直送可致ニ付承知セラレ度



昭和十三年・陸軍省 陸軍技術本部

13/1695



陸普 副官ヨリ別紙配賦表ノ箇所へ通牒  
首題細目名稱表別紙ノ通定メラレシニ付平時用

部送付ス

追テ本表ノ配布ハ九口式五糧七戰車砲ノ配布ニ依ラ  
レ度申添フ

警第二四四四號 昭和拾參年四月廿七

本表ノ別紙原稿ニヨリ官房ニ於テ五口部印刷相成度

昭和拾參年六月廿五日

附屬品送付済







